

私の教育実践 — 次代を担う生徒たちのために —

愛媛県立今治北高等学校長 二宮裕慈

初任地の宇和島に知る人はなく、大学を卒業したばかりの私には不安以外の何物もありませんでした。赴任の挨拶をするために学校を訪れたときに、事務室前にいた女子生徒が私を見るなり自然に会釈をしてくれたことを今でも覚えています。見慣れない黒い制服に戸惑いを感じたものの、なぜかすっと肩の荷が下りたような気持ちになりました。新採の時には、生意気な物言いをして先輩に叱責されたこともしばしばありましたが、先輩の背中を見て教員としてのイロハを学ぶことができたと思っています。懐かしくもあり、恥ずかしくもある、苦い青春の一ページであり、「教員とは」「教えるとは」という根源的な問いについて深く考えさせてくれた貴重な機会でもありました。



今の私があるのは、出会ってきた多くの生徒たちや先生方の恩恵の賜物だ、と感謝しています。生徒や先生との出会いという全くの偶然を選択することはできません。天の配剤の妙と言うしかありません。これまでの幾千という出会いによって、その時々に対話したことや薫陶を受けたことの名残が心の奥底に宿っているわけです。齢を積み重ね山あり谷ありの人生を歩み、思うようにならない人生の機微を知り、つらいながらも自己を直視しなければならぬ時も数多くありました。また、教員としてのキャリアを重ねてゆくうちに自信を深める一方で、素晴らしい先生方に出会うたびに、自分の力のなさや至らなさに負い目を感じ、教員としての自分の強みは何だろうかと迷ったこともありました。

私たちにとって、高校卒業後の進路保障の問題は何より大切です。二十数年後には社会の中核を担う存在になるわけですが、生徒たちの高校卒業後の成長の足跡を知る機会にはなかなか恵まれません。稀に、活躍している様子を風の噂で耳にすることはあります。高校時代からは想像することすらできない変貌ぶりだったりします。生徒の一面しか見ていなかった自分の眼力のなさに唖然としながら、必ずしも学力だけが人生を左右するものではないことをしみじみと感じます。社会という学びの場の影響の大きさと懐の深さに痛み入るわけです。そうであるなら、将来発芽する可能性のある個別の種を生徒の心にまいてゆくことの重大さは図り知れないものだと思うのです。どんな種をまいてゆくのか、それは時代の価値観や先行きの見通しを俯瞰した教員の嗅覚と力量に負うところが大きいでしょう。その際に、時代の変化に影響されない教育の本質的な根幹を決してないがしろにしてはなりません。将来どんな種が発芽するのか誰にも予想できないわけで、それぞれの教員の想いを言霊に乗せて伝えることが、そのための一助になるのではないかと思います。若い教員が、壮年の教員が、経験や先見性に基づき想いの丈を自分の言葉で熱く語る、昔の学園ドラマではないとの批判を受けそうですが、大切なことだと思うのです。

新型コロナウイルス感染症の蔓延により、オンラインによる会議や講義が当たり前とな

る中で、人間という有機的な存在である以上、直接顔を合わせる対話には（ノンバーバルの対話も含めて）大きな意義があるはずです。オンラインの盲点である触覚・味覚・臭覚の感覚を補完する上でも、臨場感の味わえる運動会などの学校行事や部活動といった直接的な体験は不可欠なものです。そして、それらは人間関係の綾を学ぶ上でも生きた学習の場になっています。情報の技術が発達して学びの方法が多岐にわたったとしても、人と人とが直接つながるローテクのよさはよさとして認識してほしいと願っています。急がば回れと言うことわざがあるように、ハイテクよりローテクの方に分があることもあるのではないのでしょうか。

生徒たちの人格の陶冶に貢献したいという想いをもちながら、長年教育に携わることができたことをうれしく思います。社会の一面的な価値観に縛られるのではなく、自らの力で人生を切り拓いてゆく生徒たち、そんな人材の育成に寄与できたのであれば誠に光栄です。